

「はじめての日本語教室」における学習者の社会参画支援と持続可能な運営体制の構築

豊橋市はじめての日本語教室 光部有希

1. 実践活動の課題と目的

本実践の対象である「はじめての日本語教室」は、愛知県のモデル事業を経て、今年度から豊橋市主催として継続実施されている。今年度は、昨年度の指導者養成講座を修了した新人指導者が加わる一方で、支援者は2日間のパートナー養成講座のみに参加しており、昨年度の支援者とは活動の理解度に差があった。このような組織の変化を踏まえ、指導者の一員として以下の2点を重点課題とした。

- ・学習者の社会参画のハードル低減：教室外でも日本語に触れる機会や、日本人と交流する機会を増やし、社会活動に参加していくハードルを下げること。
- ・運営体制の標準化と持続可能性の確保：運営が当番制へ移行する中で、業務の標準化やマニュアル作成を行い、誰もが参加しやすい教室運営を実現すること。

2. 実践活動の内容

① 教室外のネットワーク構築とリスク管理

学習者と支援者が双方向に交流できるLINEグループを構築した。支援者が「やさしい日本語」や英語等を用いて、地域の生活情報や季節の話題を自発的に発信する文化を醸成し、教室外での継続的なコミュニケーションを実現した。教室外の時間で行った「動物園クイズラリー」「抹茶・カルタ体験」は保険加入等の手続き負担を考慮し、参加者の自発的な任意参加にした。

② 運営業務の可視化と負担軽減の仕組みづくり

新人指導者が増え、特定の担当者に業務が属人化する課題に対し、以下の標準化を行った。業務一覧・マニュアルの整備：指導・指導補助・受付が実施する業務の一覧を作成し、1期での振り返りを経て改善案を反映させた。これにより、不慣れな担当者でも役割を担える体制を整えた。

ICTを活用した情報共有：「調整さん」による出欠確認の導入や、活動2日前の支援者へのトピックとワークシート共有、前日の学習者への通知を徹底し、活動当日の運営負荷軽減と情報共有の効率化を図った。

3. 成果と考察

一連の実践を通じて、学習者からはLINEでのリアクションや質問が届くようになり、教室外での日本語使用が見られた。運営面では、業務の可視化や支援者への事前通知によって「誰もが参加しやすい教室づくり」の基本が整った。事業を受託する企業から与えられた担当範囲内という制約はあるものの、コーディネーターとして既存の枠組みの中で、いかに主体的に関われるかという視点を持てたことは大きな成果である。

4.今後の課題

- ・学習者ニーズの定量的把握：今期注力した LINE グループでの発信が、実際にどの程度学習者の役に立ったかをアンケート等で精緻に把握し、支援の質を向上させる。
- ・運営マニュアルのブラッシュアップ：新たに参加する指導者がマニュアルのみで円滑に業務を遂行できるかを検証し、より分かりやすい運営体制を構築する。
- ・支援者の主体的な参画と専門性の活用：現場を支える支援者の意見や希望を運営に反映させる仕組みを作るとともに、指導者養成講座修了者がそれぞれの強みを活かして活躍できるよう、最適な役割分担の工夫を継続する

実践活動の詳細

時期	内容
5月	・支援者出欠確認を”調整さん”で行うようにし、入力方法を周知伝達
8月	<p>【ICT活用による運営安定化】</p> <p>教室活動の2日前に支援者のLINEグループに次回のトピックと使用するワークシートを送付し、出欠確認の更新を促す通知開始</p> <p>教室活動の1日前に学習者のLINEグループに翌日のトピックと集合時間を通知開始</p> <p>【学習者のネットワーク構築】</p> <p>1期学習者・支援者混合LINEグループ作成</p> <p>【指導マニュアルの整備】</p> <p>指導者向け教室活動の流れ、指導者発話の文字起こしによる標準マニュアル作成(モデル文を変更すれば基本的な進行案としてどのトピックでも使用可能)</p>
9月	<p>【教室運営マニュアルの整備】</p> <p>指導者・指導補助者・受付の業務一覧を作成</p>
10月	【教室外活動】動物園クイズラリー
12月	<p>【学習者のネットワーク構築】</p> <p>2期学習者・支援者混合LINEグループ作成</p> <p>【教室外活動】</p> <p>抹茶・カルタ体験</p>
1月	<p>【教室運営マニュアルの整備】</p> <p>・指導者・指導補助者・受付の業務一覧を更新</p>